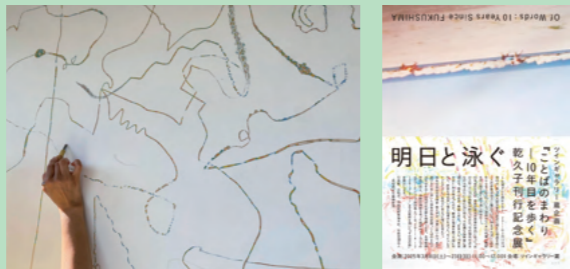


旧織物工場の蔵を改装した浜松の老舗ギャラリースペース「ツインギャラリー蔵」を継いだオーナー空閑美帆さんに、これからの同ギャラリーの展望についてお聞きしました。

2024年4月にリニューアルオープンして以来、「記憶と質感」を骨子に、レンタルギャラリーや展示などのイベントの企画をしています。「記憶」に刻むためのアプローチとして、「質感」を身体にインストールすることを実践しています。ここで言う「質感」は予兆的な感性を呼び起こすものであり、言い換えるならば「なんか面白そう」をキャッチする能力です。私は、「記憶」は人を殺しもするが、同時に生かすとも考えています。ギャラリーの運営においては、そこに賭けたい。「なんか面白そう」をキャッチする人が浜松には沢山いるからこそ、ギャラリー蔵は今日まで続けてこられたのだと思います。

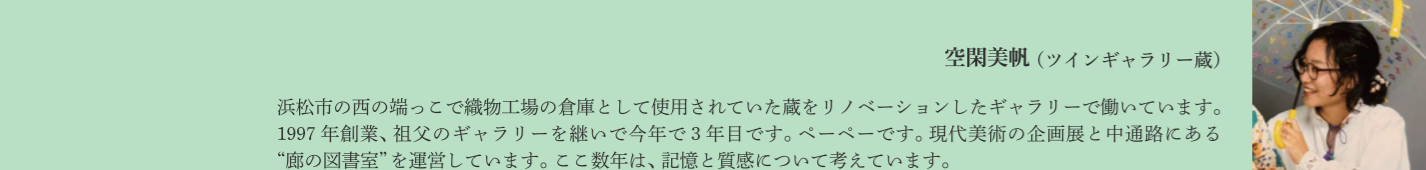
現在（2024年冬）は、浜松市在住の美術家乾久子さんの「明日と泳ぐ 乾久子 ことばのまわり 刊行記念展示」の準備中です。掲載作品の展示のほか、「3.11」という日付が意味するものを語り合うためのワークショップやトークイベントを行います。



左：夏目とも子さんとの共同作品「察す、刻む、包みこむーギャラリーの壁をつくろうー」  
右：「明日と泳ぐ 乾久子 ことばのまわり 刊行記念展示」

今後の展望として、「お花畑」をキーワードにしたシリーズもののトークイベントをやりたいなど密かに考えています。お花畑という言葉、現実主義者を気どって、楽観的な思考を揶揄する意味で使われますが、最近ふと、その現実とやらよりは「お花畑的」であった方が価値観として豊かなのではないかと思う事があります。とはいえ、お花畑に癒され、寝転がるだけ（そうありたいけれど）ではなく、そこで色々思案、企てる、そういったことができたらと思っています。

もうひとつ、「大きなお布団に皆で寝る」というワークショップをやりたいと思っています。お布団の中身から作り、ちくちく縫って、蔵の2階に大人数で寝る。なんの意味があるかはまだ分かりませんが、ロングパンで企てるべく協力者を探しています。



空閑美帆（ツインギャラリー蔵）

浜松市の西の端っかで織物工場の倉庫として使用されていた蔵をリノベーションしたギャラリーで働いています。1997年創業、祖父のギャラリーを継いで今年で3年目です。ペーペーです。現代美術の企画展と通路にある“廊の図書室”を運営しています。ここ数年は、記憶と質感について考えています。

## 05 木下恵介記念館の映画脚本 デジタルアーカイブについて



左：木下恵介記念館がある旧浜松銀行協会 浜松出身の建築家・中村與資平による建築  
中：木下恵介の書齋をイメージした常設展示室  
右：デジタルアーカイブで閲覧可能な映画脚本

木下恵介記念館では、木下恵介監督の全作品の脚本（映画化されなかったものも含む）を所蔵しています。その中には、木下監督が撮影現場で実際に使用し、演出に関するメモやカット割りなどを書き込んだものが多数あります。それらの書き込みは、木下監督がどのようにして現場から最終的な作品を作り上げたのかを伺い知ることができる貴重な資料です。しかし、ほとんどの脚本が紙製のため、書き上げてから50年以上の時を経て劣化が進んでおり、散逸・消滅するリスクが高まっています。これらの資料を後世に残すために、デジタルアーカイブの構築は当館において喫緊の課題となっています。ただ、予算における課題や、アーキビスト（永久保存価値のある情報を保存・管理する専門職）の不在などの理由で、当館が独自にデジタルアーカイブを構築するのが難しい状況です。

そのような中、幸いにも2023年度国立映画アーカイブ主催「令和5年度アーカイブ中核拠点形成モデル事業」の一環として、デジタルアーカイブ実証研究に協力する形で、当館所蔵脚本の一部をデジタル化することができました。高精度スキャン技術でデジタル化された脚本と書き込みが、肉眼では見落としがちな細かいところまではっきり見えます。数多くの名作を世に送り出した木下監督の創作過程の痕跡をたどる貴重な資料として、今年度より館内で公開しています。木下監督が書いたメッセージを通して、ぜひその多様な映画世界にもう一步踏み込んでいただければと願っています。（戴周杰・木下恵介記念館担当キュレーター）

この年度でデジタル化ができなかった映画脚本は、引き続き「令和6年度アーカイブ中核拠点形成モデル事業」にてデジタル化される予定です。機会をくださいました主催者・国立映画アーカイブと事務局・映像産業振興機構（VIPO）に、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。



### 木下恵介記念館（浜松市旧浜松銀行協会）

木下恵介記念館は、静岡県浜松市出身で、戦後日本を代表する映画監督である木下恵介監督の功績を伝え、また、浜松の映画文化高揚のために、2001年に開館しました。2009年より、浜松市指定有形文化財である「旧浜松銀行協会」内にリニューアルオープンしました。月に一度の木下恵介作品上映会や、研究者・専門家による映像文化の講演会、建築についてのツアーを開催しています。  
WEB：https://keisukemuseum.org/

## 06

### 館長からのメッセージ

### 境界連結するアートセンター

浜松は、古来多くの旅人が行き交う街道宿場町として発展し、多くの情報が日常的に交換される場であり、最新情報に触れて優れた才能を発揮した好奇心旺盛な起業家達を多く生み出しました。街道を歩いて往来する時代は、この街を貫く東海道を眺めていれば、目の前をあらゆるものが往来し、世界につながる窓のような場所だったと思います。

高速で人が行き交う時代になると、情報を得るため、全世界から人々を引き寄せるグローバル企業が磁場となりますが、それらが活性化するには都市としていくつか課題があります。『クリエイティブ資本論』の著者リチャード・フロリダは、魅力的な都市の条件として、テクノロジー（産業）、タレント（人材）とトレランス（寛容）の3Tを挙げています。トレランスとは多様性を受け入れることですが、アート環境は寛容度を測る物差しのひとつだと思います。生活にエッセンシャルではないアートを受け入れるには、都市の受容力が必要で、その環境を意識的に整える必要があります。

様々な形で表現されるアートを受け入れるには、異なる価値観を「流通」させ「翻訳」し「変換」する境界連結者（バウンダリー・スパンナー）が必要で、鴨江アートセンターはジャンルを超えたアートが交わる場となることをミッションとしています。都市としても、多様な価値観を尊重しあえる環境は創造的な人材には魅力的です。さらに、アートとテクノロジーやサイエンスが交わることで、それぞれの領域が活性化する効果も発揮でき、経済的な成果も期待できます。鴨江アートセンターの境界連結は、異なる領域をつなぐ為にアートを媒体として、様々な才能が交流できる場の機能を果たしたいと考えますが、この場を共有する人々がなければ画竜点睛を欠くことになります。この広報紙を読んでいる皆様境界連結を実感できるか、鴨江アートセンターのイベントに参加して一緒に考えてみませんか。

2025年3月 浜松市鴨江アートセンター 館長 村松厚



浜松市鴨江アートセンター

静岡県浜松市中央区鴨江町1番地

TEL：053-458-5360

WEB：https://kamoeartcenter.org/

開館時間：9:00～21:30

休館日：12月29日～1月3日/メンテナンス休館日あり

指定管理者：浜松創造都市協議会・東海ビル管理グループ

